

日本ルーラルナーシング学会誌

Japan Journal of Rural and Remote Area Nursing

第17巻 2022

研究報告

過疎地域で働き続ける中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験

室矢剛志, 藤井智子…… 1

実践報告

A離島における高齢者のもつストレス

—初めての訪問看護事業所開所時の座談会での高齢者の発言の分析から—

佐久川政吉, 津波勝代, 折戸雅恵…… 11

島嶼地域における高齢者の「地域によるケア」にみる互助の機能

田場由紀, 大湾明美, 山口初代, 砂川ゆかり, 宮里智子, 西平朋子…… 19

第16回学術集会

学術集会長講演 …………… 27

教育講演 …………… 31

シンポジウム …………… 32

総会報告 …………… 42

日本ルーラルナーシング学会誌投稿規定 …………… 59

編集後記 …………… 63

研究報告

過疎地域で働き続ける中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験

Life experience that influenced the activities of public health nurse who continue to work in rural area

室矢剛志¹⁾, 藤井智子²⁾
Takeshi Muroya¹⁾, Tomoko Fujii²⁾

キーワード：保健師，過疎地域，生活体験，モチベーション

抄録

- 【目的】 過疎地域で働く中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験を明らかにし，働き続けるためのモチベーション向上への示唆を得る。
- 【方法】 過疎地域市町村に所属する中堅期保健師5名を対象に，就職後から現在までの生活体験や勤務継続することができた理由等について半構造化面接を行い，質的記述的に分析した。
- 【結果】 139コード，38カテゴリ，4コアカテゴリが生成された。就職当初は，住民との距離の近さや保健師の仕事に【不安や戸惑いを感じる体験】があり，時間とともに【住民とのつながりが濃いゆえの体験】，【住民であり保健師である体験】を積み上げ，これらの体験に面白さを見出し，【生活や仕事を肯定的に捉える体験】をしていた。
- 【考察】 住民であり保健師である立場の体験が地域の理解を深め，保健師活動に良い影響をもたらし，過疎地域での生活全体をポジティブに捉え直すことにつながった。早くから住民であり保健師でもある役割の重なりを肯定的に意味づけし，自らの成長を実感することが自信となり，モチベーションの向上になることが示唆された。

I. はじめに

全国で過疎関係市町村の指定を受けている自治体は，1,718市町村中797市町村（46.4%）であり，その中でも北海道は179市町村中149市町村（83.2%）が該当し¹⁾，全国と比べて過疎関係市町村に該当する割合が高い。北海道は全国の総面積の約22.1%を占め，近畿・中国・四国地方を合わせた面積と同等の広さを有しており，人口密度は都道府県の中で最も低い²⁾。また，人口の3分の1以上が札幌に集中する一方で，第1次産業等の主な生産の場である地方部の人々は広域に分散して生活する散居形態をなしている³⁾。地方の人口減少は，経済規模を縮小させ，日常の買い物や医療など地域住民の生活に不可欠なサービスの確保が難しくなると考えられている⁴⁾。

そのため，北海道の過疎地域市町村では，医療，福祉，介護，教育，商業等の生活関連サービスの減退による生活のしづらさがあり，都市部とは異なる生活環境にあるといえる。

過疎地域で働く保健師は，地域住民の日常生活，家族関係，地域の中での人間関係をよく理解している特徴⁵⁾がある。また，私生活に常に関わってくるような業務から行政や地域保健に密着した業務など業務内容が多岐にわたっている⁶⁾。井口⁷⁾は，行政保健師の仕事の量的・質的負担，情緒的負担，役割葛藤といった「仕事の要求」が大きいほどバーンアウトとなり，離職意図が強くなると報告している。過疎地域で働く保健師は，少人数で多様な業務を遂行していることから都市部と異なる情緒的負担や

受付日：2021年6月17日 採択日：2022年2月3日

1) 名寄市立大学保健福祉学部看護学科 Nayoro City University

2) 旭川医科大学医学部看護学科 Asahikawa Medical University

役割葛藤を抱え仕事への要求は大きい可能性があると考えられる。また、保健師の活動基盤に関する基礎調査⁸⁾では、離職理由の中に保健師としてのやりがいがない(14.0%)、業務に関する精神的負担が大きい(12.3%)こと等が要因としてあげられており、過疎地域で働き続けるためのモチベーションを保つことは重要である。

これらのことから、過疎地域の保健師がどのような体験をし、地域に根差していくのかその過程や特徴を明らかにすることは離職を防止していくためにも意義がある。しかし、保健師の過疎地域における生活や働き続けるモチベーションに焦点を当てた先行研究は見当たらなかった。そこで、本研究では北海道を対象地域として、過疎地域で働く中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験を明らかにし、働き続けるためのモチベーション向上への示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 用語の定義

生活体験：広辞苑⁹⁾によると、「生活」は、生存して活動すること、世の中で暮らしてゆくこととされている。生活体験は、「日常生活において自分自身が身をもって経験したこと」と幅広い意味合いを持たせる定義や、「掃除や炊事、洗濯、更衣など生活に関連した動作や、自治会の活動など地域社会での生活活動に関連した体験」といった具体的な定義など¹⁰⁾、研究者によって様々であった。過疎地域で働く保健師の実践では、職場と生活の場の境界がない¹¹⁾特徴があることを踏まえ、本研究では、対象者が就職してから現在まで住民の立場と保健師の立場で暮らしていく体験を生活体験と定義した。

2. 研究対象

出身地と異なる過疎地域市町村に新人として就職した後、当該市町村で働き続ける中堅期保健師を対象とした。また、長江¹²⁾は中堅期保健師を中堅前期(5年～9年)、中堅中期(10年～14年)、中堅後期(15年～19年)と定義しており、北海道保健師現任教育マニュアル¹³⁾で新任期保健師を5年目までとしている。これらの参考に、幅広い生活体験を聞き取れるよう、経験年数6年目から19年目を対象とした。

3. 対象地域の選定方法

対象地域は、北海道の中で過疎地域市町村の全部過疎に該当する人口10,000人未満の市町村とした。また、人口10,000人未満の市町村で地域保健部門に配属されている保健師数の平均が3.9名であること踏まえ¹⁴⁾、地域保健部門の保健師が4名以下であることを条件とした。

以上の要件に該当する中堅期保健師を機縁法にて抽出し、市町村の所属長および本人に対して研究目的、研究方法、倫理的配慮について文書と口頭で説明した上で、同意が得られた者を対象とした。

4. 調査方法

データ収集は、2017年9月～11月の期間で実施した。研究参加に同意が得られた対象者の都合の良い日時と場所を設定し、インタビューガイドに基づく半構造化面接を実施した。面接はそれぞれ1回行い、時間はおおむね60分程度とした。面接内容は、研究対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。

5. 調査内容

基本属性として性別、年齢、勤続年数、婚姻状況、同居家族、人口規模、保健師の配属状況、最寄りの人口10万人以上の都市までの距離について聞き取った後、インタビューガイドに沿って、就職した理由、過疎地域における生活体験の中で保健師活動に影響した体験や勤務継続につながる体験について半構造化面接を実施した。

6. 分析方法

過疎地域で働き続ける中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験を十分に聞き取り理解するため、黒田¹⁵⁾やグレッグら¹⁶⁾の質的記述的研究方法を参考に分析を行った。インタビュー内容から作成した逐語録を事例ごとに熟読し、保健師活動に影響を与えた生活体験を表している部分をコード化した。コード化したデータを類似性と相違性を検討しながら分類し、サブカテゴリを生成した。そして、類似した意味内容のサブカテゴリを束ね意味することを推敲しカテゴリを生成した。さらに、住民としての立場や保健師としての立場に着目してカテゴリを分類し、包括する上位の概念をコアカテゴリとした。

なお、分析した結果の真実性を確保するため、研究協力者に抽出したカテゴリの分析結果について違和感や疑問がないか確認を求めた。また、内容分析において公衆衛生看護学および質的研究に精通する

研究者と全分析過程において検討を重ね、分析の妥当性の確保に努めた。

7. 倫理的配慮

本研究は、旭川医科大学倫理委員会の審議を受け、承認を得た研究計画書に基づき実施した（承認日：日付2017年7月28日）。研究対象者に、本研究の趣旨、目的、方法、研究協力は自由意志であること、いつでも研究の協力を中止できること、研究で得られた個人情報に漏れることがないよう匿名性を守ること、得られたデータは厳重に保管し研究終了後に処分すること、得られたデータを研究以外の目的では使用しないこと、研究を拒否または中断しても不利益は生じさせないことなどについて文書および口頭で説明した。また、面接はプライバシーが確保された研究対象者の希望する場所で実施した。

Ⅲ. 研究結果

1. 対象者の基本属性（表1）

5市町村の5名に依頼し、研究の同意が得られた対象者は5名であった。対象者の性別は全員女性、年齢は29歳～44歳で平均36.2歳、勤続年数は7年～19年で平均13.6年、全員既婚者であり、子どものいる方は3名であった。面接はそれぞれ職場の個室で1回実施し、面接時間は53分～83分で平均63.6分であった。研究対象者が所属している市町村は、人口5,000人未満が3市町村、3,000人未満が2市町村であり、地域保健分野に所属する保健師数は3～4名で平均3.4名、所属する市町村から人口10万人の都市までの距離は約30km～約210kmであった。

表1. 対象者の基本属性

	A	B	C	D	E
性別	女性	女性	女性	女性	女性
年齢	40代	30代	30代	40代	20代
勤続年数	19	16	7	19	7
婚姻	有	有	有	有	有
同居家族	5名	5名	2名	4名	2名
人口規模	5,000人未満	5,000人未満	3,000人未満	5,000人未満	3,000人未満
地域保健分野に所属する保健師	3名	3名	4名	4名	3名
人口10万人以上の都市までの距離	約130km	約90km	約30km	約210km	約130km

2. 過疎地域で働き続ける中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験（表2）

分析の結果、139コード、38サブカテゴリ、12カテゴリ、4コアカテゴリが生成された。文中では、コアカテゴリを【 】、カテゴリを《 》、サブカテゴリを〈 〉、コードを「 」で記述する。過疎地域で働き続ける中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験には、【不安や戸惑いを感じる体験】、【住民とのつながりが濃いゆえの体験】、【住民であり保健師である体験】、【生活や仕事を肯定的に捉える体験】があった。コアカテゴリごとに結果を述べる。

1) 【不安や戸惑いを感じる体験】

(1) 《初めて住む地域での生活に漠然とした不安を感じる》

就職当初は、「就職するまで来たことがなかったため、町のどこに何があるかわからず孤独を感じた」など〈住んだことのない地域で生活していくことに孤独感があった〉。また、「近隣まで買い物に行くのも車がないといけないという不便さを感じ、長く働き続けられるのかなという気持ちがあった」など〈生活面での不便さから漠然と長く働き続けられるのかなという気持ちになった〉と感じ、初めて住む地域での生活に漠然とした不安を感じていた。

(2) 《住民との距離が近すぎて窮屈さを感じる》

過疎地域で生活をしてみて、「住民は自分のことをずっと見ていないのではないかと感じ、恐ろしさがあった」「今まで小さな市町村で生活した経験がなかったため、どこの誰がっていうとあの人がねってわかる感覚にびっくりした」など〈住民に生活を見張られている感覚があり窮屈さと戸惑いがあった〉。また、「広報などを通じて、住民が一方的に自分のことを知っており、住民から声をかけられることにストレスを感じていた」など〈住民が一方的に自分

表2. 過疎地域で働き続ける中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験

コア	カテゴリ	サブカテゴリ (コード数)
不安や戸惑いを感じる体験	初めて住む地域での生活に漠然とした不安を感じる	住んだことのない地域で生活していくことに孤独感があつた (2) 生活面での不便さから漠然と長く働き続けられるのかなという気持ちになった (3)
	住民との距離が近すぎて窮屈さを感じる	住民に生活を見張られている感覚があり窮屈さと戸惑いがあった (7) 住民が一方的に自分の存在を知っているという状況に戸惑いを感じた (2) 保健師として立派な生活をしなければならないと考えてしまい苦しかった (2)
	保健師として何をすべきか戸惑う	就職当初は住民の生活がわからず何をすればいいのか戸惑いがあった (3) 就職当初は住民とのつながりがなくて家庭訪問に緊張感があつた (1)
住民とのつながりが濃いゆえの体験	担わなければならない地域の役割が住民とのつながりを強くする	地域住民としての役割が多い反面住民とのつながりができた (5) 子育てをきっかけに地域の行事に参加する機会が増え住民とのつながりも増えた (1)
	一住民として受け入れられ地域に馴染んでいく	よそ者だった自分が住民から受け入れられて地域の一員だと感じる事ができた (3) 住民とのつながりが増えることでマイナスに感じていた生活面がプラスに変わった (10) 結婚を機にこのままこの地域で生活しようと思った (1) 時間とともに住民との距離感に馴染むことができた (2)
住民であり保健師である体験	生活の場に入り込み専門職として地域をまるごと理解する	人とのつながりが強くなることであらゆる場面で情報が入ってくる (8) 住民との距離が近いゆえ役場職員として専門外の対応が求められる (1) 住民からのもらいものや自らの除雪の苦勞から生活をイメージする (2) 保健師の立場からではなく住民として得た情報が保健師活動に役立った (9) 住民同士お互いを知っていることが当たり前の風土だと少しずつ理解した (2) 子どもの通う教育機関と保健師活動の担当地区が重なることで連携の基礎ができた (4) 住民と同じ生活をする事で基幹産業の大変さを理解し尊敬の念を持つ (3)
	住民の立場を利用して信頼と安心感を与える	生活の場面で気軽にかかわることが保健サービスにつながる (3) 同じ地域で暮らしていることで住民の信頼や安心感を引き出せている (5)
生活や仕事を肯定的に捉える体験	気持ちの波がある中でも前向きになるよう工夫をする	経験年数を重ねていくことでプレッシャーを感じる中やりがいを見出す (3) 地域での生活のことを深く考えすぎない (1) 地域自体が嫌になったときは違う地域の人と遊んで気分転換をして乗り越える (1)
	小さい町での生活のしやすさを見出す	話しやすい関係性にある小さなコミュニティに心地良さを感じた (4) 限られた社会資源の生活に慣れていった (9)
	つながりの濃い人間関係に面白さを見出す	住民にどこで会っても声をかけられ頼ってくれることにうれしさを感じる (3) 保健師として住民に受け入れられると感じる (3) 住民同士のつながりの強い人間関係の中に面白さを見出す (2) 職場の人間関係の良さを感じる (9)
	成長を実感し自信につなげる	住民と話す機会の多さが自らの知見を広げることにつながった (4) 自分自身の地域の中での子育てが保健師の成長につながった (6) 保健師が少ない職場の中で保健所保健師の存在が自分の目指す姿となった (1) 学会に発表する経験から自分たちの活動に自信が持てた (1)
	濃いつながりを活かした活動がしたいという想いを抱く	保健師として成長させてくれた住民に対して恩返しをしたいという気持ちを抱く (3) 住民の声が届きやすい環境の中で期待される保健師活動をしていく (8) もともとある住民同士の強いつながりを活かした保健師活動を目指す (2)

の存在を知っているという状況に戸惑いを感じた)。さらには、「新任期のころは、保健師として立派な生活をしなければならないと考えており、自分がいい人でいなければいけないという思いが強かった」「除雪や草刈りなど身の回りの生活自体をちゃんとやらないといけないというのをなんとなく感じて苦しかった時期もあった」など〈保健師として立派な生活をしなければならないと考えてしまい苦しかった〉と感じ、住民との距離が近すぎて窮屈さを感じていた。

(3)《保健師として何をすべきか戸惑う》

出身地と異なる過疎地域で保健師として初めて働いてみて、「住民の生活がわからないのでどう支援すればいいのだろうと感じ、何のために自分がいるのかわからなかった」「保健師は何をするのかわからず、言われたことをやっているという感覚だった」など〈就職当初は住民の生活がわからず何をすればいいのか戸惑いがあった〉。また、〈就職当初は住民とのつながりがなくて家庭訪問に緊張感があった〉とも感じ、就職当初は保健師として何をすべきか戸惑いがあった。

2)【住民とのつながりが濃いゆえの体験】

(1)《担わなければならない地域の役割が住民とのつながりを強くする》

地域活動の役割を担う人材が不足している現状から、「消防団、サークル、労働組合などいろいろな役割が全部回ってきたが、その活動を通じて人とのつながりが広がり、いろんな人と仲良くなったことが一番良かった」「地域の活動に参加することを通して住民とのかかわりが増え、友達ができた」などと捉え、〈地域住民としての役割が多い反面住民とのつながりができた〉と感じていた。また、自らのライフイベントである〈子育てをきっかけに地域の行事に参加する機会が増え住民とのつながりも増えた〉ことを感じ、地域の役割を担うことや自らのライフイベントを機に住民とのつながりが強くなることを自覚していた。

(2)《一住民として受け入れられ地域に馴染んでいく》

住民とのつながりが増えたことで、〈よそ者だった自分が住民から受け入れられて地域の一員だと感じることができた〉と実感していた。また、「自分を知ってもらえている人が増えたことで、人と会えるのが嫌だと感じなくなった」「住民とのつながりができることで、生活しやすくなり、仕事もしやすくなったと感じた」など〈住民とのつながりが増える

ことでマイナスに感じていた生活面がプラスに変わった〉と感じていた。さらには、〈結婚を機にこのままこの地域で生活しようと思った〉のように、ライフイベントをきっかけとして過疎地域での生活を続けていくことを考えていた。そして、さまざまな場面で住民として受け入れられることで、「就職したときから住民との距離感が変わらないが、時間とともにその距離感に慣れ、嫌だと感じなくなった」「人とのつながりや過ごしてきた時間が地域に馴染ませてくれた」のように〈時間とともに住民との距離感に馴染むことができた〉と捉え、一住民として受け入れられ地域に馴染んでいくことを実感していた。

3)【住民であり保健師でもある体験】

(1)《生活の場に入り込み専門職として地域をまるごと理解する》

「人とのつながりが強い分、いろいろな情報が得られる。聞きたくない情報もあるが、保健師活動にはいい影響があると感じている」「生活の場に出ることで、住民の行動やつながりを把握することができ、実際の支援の場面で把握した情報を活用することができた」など〈人とのつながりが強くなることであらゆる場面で情報が入ってくる〉ことを認識していた。また、「高齢者の方は、役場が一体的なものだと捉えている方が多く、保健師活動している中で役場全般のことを聞かれることがある」のように〈住民との距離が近いゆえ役場職員として専門外の対応が求められる〉状況にもあった。それでも、〈住民からのもらいものや自らの除雪の苦勞から生活をイメージする〉〈保健師としての立場でなく住民として得た情報が保健師活動に役立った〉〈住民同士お互いを知っていることが当たり前な風土だと少しずつ理解した〉〈子どもの通う教育機関と保健師活動の範囲が重なることで連携の基礎ができた〉のように、生活の中で得られた情報や住民とのつながりから専門職として地域の理解を深めていた。さらには、「自らが基幹産業を体験することで、従事することの大変さや家族として支えることの大変さがわかり、尊敬できるようになった」など〈住民と同じ生活をするすることで基幹産業の大変さを理解し尊敬の念を持つ〉ようにもなり、自ら住民の生活の場に入り込むことで専門職として地域をまるごと理解していた。

(2)《住民の立場を利用して信頼と安心感を与える》 住民であり保健師である立場を利用して、「保健

師としてではなく、仕事以外の場面で教室などの声かけをしたら、教室につながるといった」「生活の場面で気軽に健診の勧奨をしたほうが申し込みしてもらいやすかった」など「生活の場面で気軽にかかわることが保健サービスにつながる」と感じていた。また、「この地域で暮らしていて、顔を知られ、自分自身のことを知ってもらえることで有効な関係性が築けていき、住民が安心して接してくれるようになった」など「同じ地域で暮らしていることで住民の信頼や安心感を引き出せている」と捉え、住民である立場を利用して信頼と安心感を与えることができることを実感していた。

4) 【生活や仕事を肯定的に捉える体験】

(1) 《気持ちの波がある中でも前向きになるよう工夫をする》

保健師として働き続ける状況について、「日々の保健師活動の中で、モチベーションに影響することが数多くあり、その中で気持ちの波がありながら勤務継続している」「経験を重ねていくと、仕事に対するプレッシャーを感じるが、やりがいを感じたり、頑張らなきゃとも思う」と捉え、「経験年数を重ねることでプレッシャーを感じる中やりがいを見出す」ことを実感していた。また、「このまま田舎で暮らしていて、自分の人生ってどうなるのだろうみたいなことを思いつめずに深く考えない」のように「地域での生活のことを深く考えすぎない」ようにすることや「地域自体が嫌になったときは違う地域の人と遊んで気分転換をして乗り越える」のように、気持ちの波がある中でも前向きになるよう工夫をしていた。

(2) 《小さい町での生活のしやすさを見出す》

過疎地域で生活が続けていく中で、「1つの保育所、小学校、中学校しかないが、自分たちの声が届きやすい、保護者のつながりを作りやすい、いろいろな人と話しやすいという点はいいと思う」「子どもを連れてくると住民が声をかけてくれて、人の温かさを感じた」など「話しやすい関係性にある小さなコミュニティに心地良さを感じた」と捉えていた。一方、都市部と比べて「子どもの少年団や部活が少なく、選べない」「結婚後引越しが必要になったが、古い公営住宅の他に家はなく、住宅を選べなかった」など限られた選択肢の中で生活していた。それでも、「買い物不便さは、生活していくにつれて慣れていった」「この先の妊娠、出産を考えたとき社会資源が少なく、不便に感じると思うが、そ

れも慣れていくのだろうなと思っている」「暮らししてみると都市がそう遠く感じず、意外と不便もないなと思った」など「限られた社会資源の生活に慣れていった」と捉え、小さい町での生活のしやすさを見出していた。

(3) 《つながりの濃い人間関係に面白さを見出す》

時間とともに住民とのつながりが増えていくことで、「プライベートでも気軽に相談してくれる、保健師としてみてもらえていることはうれしいと感じる」など「住民にどこで会っても声をかけられ頼ってくれることにうれしさを感じる」ことが語られた。また、「住民に自己紹介をしたときに、みんなが興味を持って迎えてくれて、住民が保健師を受け入れてくれていると感じた」「だんだんと顔と名前を覚えられることに嬉しさを感じ、自分を頼ってくれている住民さんもいることで仕事が続けられている」「自分を頼ってくれる住民の存在が仕事を続けられるモチベーションに影響している」のように「保健師として住民に受け入れられると感じる」と実感していた。このように、住民と良好な関係を築いていくことで、「人のネットワークの強さを感じ、そのネットワークを活用して保健師活動に役立つ情報を収集できることに面白さを感じた」など「住民同士のつながりが濃い人間関係の中に面白さを見出す」ようになった。さらには、少人数である「職場の人間関係の良さを感じる」と捉え、少人数の職場における職員と良好な関係を築くという点でもつながりの濃い人間関係に面白さを見出していた。

(4) 《成長を実感し自信につなげる》

住民同士のつながりが濃い地域で生活が続ける中、「住民と話す機会が多いことで自らの知見を広げることができた」と実感していた。また、自らのライフイベントを通して、「自分の子育て経験を振り返ることで、自分と同じように苦しんでいるお母さんになにか伝えられるかもしれないと感じた」など「自分自身の地域の中での子育てが保健師としての成長につながった」ことを認識していた。さらには、「保健師が少ない職場の中で保健所保健師の存在が自分の目指す姿となった」ことや自分たちの取り組みをまとめて「学会に発表する経験から自分たちの活動に自信が持てた」ことで保健師としての成長を実感し自信につなげていた。

(5) 《濃いつながりを活かした保健師活動がしたいという想いを抱く》

過疎地域で働き続ける中、「保健師として成長させてくれた住民に対して、保健師活動を通じて恩返

ししたいという気持ちを持っており、保健師をやめ
ないで続けているモチベーションに影響している」
など〈保健師として成長させてくれた住民に対して
恩返しをしたいという気持ちを抱く〉ことが語られ
た。また、「住民との距離が近いからこそ、住民の
生活を把握し、住民の気持ちを考えた保健師活動が
できると感じた」「住民が言ってくれるということ
は、期待されているからだと思うし、そういう声を
大事に保健師活動していきたいと思う」などと捉え、
〈住民の声が届きやすい環境の中で期待される保健
師活動をしていく〉ことを大切にしていた。さらに
は、「住民同士のつながりを少しずつ保健師活動に
関連させることで住みやすい町になると感じ、住民
の力を活かした町を目指して活動している」など〈も
ともとある住民同士の強いつながりを活かした保健
師活動を目指す〉といった住民同士の濃いつながり
を活かした活動がしたいという想いを抱いていた。

Ⅳ. 考察

過疎地域で働く中堅期保健師は、時間とともに生
活や仕事の捉え方がポジティブに変化し、働き続け
るモチベーションを高めていたと考える。本研究で
は、過疎地域で働く中堅期保健師の活動に影響を与
えた生活体験の特徴と働き続けるモチベーションを
向上するための支援の観点から考察していく。

1. 過疎地域で働く中堅期保健師の活動に影響を与 えた生活体験の特徴

過疎地域で働く中堅期保健師は、就職当初、《初
めて住む地域での生活に漠然とした不安を感じる》
といった多くの人々が感じる初めての体験への不安
に加え、《住民との距離が近すぎて窮屈さを感じる》
といった住民の距離に戸惑いがみられた。中山間地
域に暮らす20代社会人を対象とした研究では、地
域社会の閉塞感や個人生活への干渉が住み易さに
とってマイナス要因になると報告されている¹⁷⁾。本
研究では、住民に一方的に知られている状況や立派
な生活をしなければいけないと考えてしまうことな
ど、自らの立場が周囲から見張られている実感につ
ながり、見知らぬ地域で生活していくことに不安や
戸惑いといったマイナスの気持ちを持つようになった
と考える。さらに、《保健師として何をしたらよ
いか戸惑う》という新任期保健師が抱える困難感¹⁸⁾
も感じていた。住民との距離の近さからくる戸惑い
に加え、初めて社会人になったことによる不安や緊
張も抱えており、就職当初はストレスの高い時期で

あったと考える。生活や仕事に不安や戸惑いを感じ
る中、《担わなければならない地域の役割が住民と
のつながりを強くする》体験をしていた。2015年
の厚生労働白書によると、全国的に住民の地域活動
への参加が低下傾向¹⁹⁾にあり、過疎地域において
は都市部よりも担い手が減少し、生活者として避け
られない町内会活動などといった地域住民の役割を
担わなければならない状況にあるといえる。このよ
うなやや強制的な体験を通じて住民とのつながりが
必然的に強くなっていく姿がみられ、住民とのつな
がりが強まっていくことで《一住民として受け入れ
られ地域に馴染んでいく》体験をし、過疎地域での
生活の良い面にも気づくことができたと考える。

さらに、《生活の場に入り込み専門職として地域
をまるごと理解する》《住民の立場を利用して信頼
と安心感を与える》といった住民であり保健師でも
ある役割の重なりを利用した活動を実践していた。
そして、住民と同じ地域で生活することで基幹産
業の大変さを理解し、産業を支えている住民への尊
敬の念を持つようにもなった。山崎ら²⁰⁾は、地域
の慣習、行動パターンに理解や共感を示すことは住
民の精神的安寧につながると述べている。住民であ
り保健師でもある立場で地域を深く理解し、生活の
中で築いた人間関係を意図的に活用することが保健
師として住民に信頼と安心感を与える活動となり、
保健師活動に良い影響をもたらしたという実感につ
ながったと考える。これらの住民であり保健師であ
る体験の積み重ねから、《気持ちの波がある中でも
前向きになるよう工夫をする》《小さい町での生活
のしやすさを見出す》《つながりの濃い人間関係に
面白さを見出す》《成長を実感し自信につなげる》
といった生活や仕事を肯定的に捉え、《濃いつなが
りを活かした保健師活動がしたいという想いを抱
く》体験をしていた。大森ら²¹⁾は、地域への愛着
を日常生活圏における他者との共有経験によって形
成され、社会的状況との相互作用を通じて変化する
地域に対する支持的意識であり、地域の未来を志向
する心構えであると定義した。本研究では、過疎地
域で住民とともに体験したことを大切なものとして
捉え、自らを成長させてくれた住民に対して恩返し
がしたいという想いのもと地域の将来を見据えた目
標を持っており、地域への愛着が形成されていたと
考える。

2. 働き続けるモチベーションを向上するための支援 働き続けるモチベーションを向上するうえで、《つ

ながりの濃い人間関係に面白さを見出す》体験が注目される。本研究では、地域住民とかかわる機会が多く、どこで会っても声をかけられ頼られるなど住民とのつながりの濃い生活体験をしていた。山田ら²²⁾は、心の拠り所の獲得が新人保健師の精神面での支柱となることを述べており、つながりの濃い生活体験の中で良好な人間関係を築けたことや住民からの期待を実感できたことが心の支えとなったと考える。そのため、就職後まもなくから臆することなく住民と関係を良好に築くとともに、濃い人間関係を土台とした住民であり保健師である役割の重なりが効果的な保健師活動につながることを意味づけていく必要がある。さらには、〈職場の人間関係の良さを感じる〉ことを実感していた。職場でのコミュニケーションの豊かさが成長を促す²³⁾ことや、プリセプターが信頼しあえる関係を築き安心感を与えることが仕事を継続していく上で重要な役割を果たす²⁴⁾ことから人間関係の良さはモチベーションを高める大切な条件といえる。本研究の対象地域は、所属する保健師の平均が3.4名の小規模な職場環境であり、一人一人の保健師の役割の範囲が広くプリセプターを決めることも難しいことが推測されるため、過疎地域で保健師として暮らすことの体験を日頃の良好な人間関係のなかで語り合う職場風土も大切であると考え、新任期保健師は、場を与えられないと自ら相談することができない²⁵⁾こともあり、特に、就職当初の過疎地域での暮らしの不安や戸惑いを受け止め、生活や仕事について気軽に相談できる機会を職場の中で意図的に作ることが過疎地域での生活をスタートする上で必要不可欠である。

本研究では、働き続ける中で《気持ちの波がある中でも前向きになるよう工夫をする》ことでやりがいを見出すとともに、《成長を実感し自信につなげる》体験をしていた。保健師は職務経験を重ねることで自信を獲得し²⁶⁾、実践経験を振り返り意味付けることで実感に伴う学びを得たり、保健師活動の基盤となる考えを深めたり、目指す方向性を見出すといわれている²⁷⁾。また、新任期保健師が意欲的に学習を行うためには、保健師の役割や活動、思考や価値観に対して意義を感じる必要があるといわれている²⁸⁾。本研究においても活動をまとめて学会に発表することが自信となっており、過疎地域での保健師活動を省察的に振り返る機会を持つことが自らの成長の実感に必要であると考え、

以上のことから、働き続けるモチベーションを向上する支援として、住民や職場の濃い人間関係を前

向きに捉え住民であり保健師である重なりを肯定的に意味づけること、現任教育の中で生活や仕事について気軽に相談できる機会を意図的に作ること、自らの活動を省察的に振り返り成長の自覚につなげ過疎地域で働く自信をつけることが重要である。

V. おわりに

本研究では、過疎地域で働き続ける中堅期保健師の活動に影響を与えた生活体験を明らかにした。住民であり保健師でもある立場が地域の実態を深く捉えることにつながり、住民との関係を主軸とした生活体験が保健師としての活動の幅を広げ自信や成長に寄与する特徴にあることが明らかになった。一方で、働き続けるモチベーションを低下させる生活体験があることも推察されるため、それらの生活体験と離職の関連についても明らかにしていく必要がある。また、今回の対象者はすべて女性であり既婚者であった。〈結婚を機にこのまま地域で働こうと思った〉というデータが示す通り、既婚である影響は大きいといえる。さらに、性別や経験年数によっても生活体験の捉え方に影響があると考えられる。そのため、今後は対象者のライフイベントを考慮し、男性を含めた調査や経験年数別での生活体験についても検討していく必要がある。また、今回は北海道を対象地域に選定したが、地域特性によって生活体験の特徴が異なるため、全国の過疎地域に拡大して検討していくことも必要である。

最後に、本研究を実施するにあたり、ご多忙にもかかわらず、調査に快くご協力いただきました市町村保健師の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本研究は平成30年度旭川医科大学大学院修士課程の論文に加筆・修正を加えたものである。

文献

- 1) 総務省自治行政局過疎対策室：過疎関係市町村都道府県別分布図。4-5, 2016.
- 2) 総務省統計局：平成27年度国勢調査最終報告書。9-13, 2018.
- 3) 国土交通省：北海道総合開発計画。12-14, 2016.
- 4) 厚生労働省：平成27年度版厚生労働白書－人口減少社会を考える－。4-23, 2015.
- 5) 大平肇子，小林文子，吉岡多美子ほか：日本におけるルーラルナーシングの役割モデルについての研究。三重県立看護大学紀要，6；75-84, 2002.

- 6) 吉岡多美子, 小林文子, 大平肇子ほか: ルーラルナーシングにおける専門家役割モデルの検証. 三重県立看護大学紀要, 6:85-94, 2002.
- 7) 井口理: 行政保健師の離職意図に関連する「仕事の要求」と「仕事の源」Job Demands-Resources Modelによる分析. 日本公衆衛生雑誌, 63(5): 227-239, 2016.
- 8) 公益財団法人日本看護協会: 保健師の活動基盤に関する基礎調査報告書. 60-62, 77-99, 2018.
- 9) 新村出: 第六版広辞苑. 岩波書店, 1534-1535, 2008.
- 10) 黒白恵子, 杉山洋介, 小林紀明ほか: 看護教育における「生活経験」「生活体験」に関する解釈の一考察. 目白大学健康科学研究, 1:121-127, 2008.
- 11) 前掲書5)
- 12) 長江尚美: 中堅期保健師の人材育成に関するガイドラインおよび中堅期保健師の人材育成に関する調査研究報告書. 財団法人日本公衆衛生協会, 3-12, 2012.
- 13) 北海道保健福祉部: 北海道保健師現任教育マニュアル. 5-10, 2006.
- 14) 荒田義彦: 保健所の有する機能・健康課題に対する役割に関する研究報告書. 財団法人日本公衆衛生協会, 109-115, 2010.
- 15) 黒田裕子: 第四版看護研究Step by Step, 医学書院, 173-214, 2012.
- 16) グレグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江: よくわかる質的研究の進め方・まとめ方. 医歯薬出版, 54-72, 2015.
- 17) 青木秀幸, 鎌田元弘: 中山間地域における20代社会人の住み易さ意識と生きがい感からみた生活環境-農村部における若者の生活実態と農村環境の志向に関する研究その3. 日本建築学科計画系論文集, 第551号:189-196, 2002.
- 18) 頭川典子, 安田貴恵子, 御子柴裕子ほか: 学士課程卒業後の保健師が新任期に感じる困難と対処状況. 長野県看護大学紀要, 5:31-40, 2003.
- 19) 厚生労働省: 平成27年度版厚生労働白書-人口減少社会を考える-. 144-162, 2015.
- 20) 山崎不二子, 稗圃砂千子, 大重育美: へき地看護の特徴を活かした研修プログラムの開発 -へき地への派遣経験を持つ看護職からの聞き取り-. 福岡女学院看護大学紀要, 5:1-11, 2014.
- 21) 大森純子, 三森寧子, 小林真朝ほか: 公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析. 日本公衆衛生看護学会誌, 3(1):40-48, 2014.
- 22) 山田小織, 越田美穂子: 新人保健師が自己成長感を獲得していくプロセス. 日本看護研究会雑誌, 40(5):803-811, 2017.
- 23) 藤井智子, 塩川幸子, 北村久美子: 北海道の自治体に働く新任期保健師の困難な状況と対処方法. 北海道公衆衛生学雑誌, 29(2):107-113, 2016.
- 24) 山田小織, 越田美穂子: 新人保健師育成に向けたプリセプターの支援内容. 日本公衆衛生看護学会誌, 15(1):57-65, 2016.
- 25) 塩見美抄, 牛尾裕子: 兵庫県における保健師の臨床研修に必要な内容と体制-新任期・中堅期保健師のニーズをもとに-. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 19:55-68, 2012.
- 26) 小川智子, 中谷久恵: 行政保健師の職務への自信とその影響. 日本公衆衛生雑誌, 59(7):457-465, 2012.
- 27) 御子柴裕子, 下村聡子, 安田貴恵子ほか: 中山間地域の市町村に勤務する中堅期保健師が実践経験を通じて得ている学び. 日本ルーラルナーシング学会, 11:1-13, 2016.
- 28) 中谷久恵, 大塚美樹: 行政機関に勤務する新任保健師の職業的アイデンティティの構成要素. 広島大学保健学ジャーナル, 14:1-10, 2017.

A離島における高齢者のもつストレングス

ー初めての訪問看護事業所開所時の座談会での高齢者の発言の分析からー

Strength of the Elderly in Remote Island of A :
Via the analysis of remarks of the elderly in the discussion meeting
when the first home-visit nursing office was opened

佐久川政吉¹⁾, 津波勝代²⁾, 折戸雅恵²⁾
Masayoshi Sakugawa¹⁾, Katsuyo Tsuha²⁾, Masae Orito²⁾

キーワード：島嶼，訪問看護，高齢者，ストレングス，つながり

抄録

本研究の目的は、A離島の高齢者のもつストレングスを明らかにし、そのストレングスを活かしたA離島で初めての訪問看護の実践への示唆を得ることである。

研究協力者は高齢者サロン15ヶ所の座談会に参加した高齢者173人で、彼らから出てきた質問・意見等をデータとした。データに「研究者から捉えられる高齢者のもつストレングスは何だろうか」の問いをかけ、キーセンテンスとして導き出し、類似した意味内容を集めサブカテゴリーとし、抽象度を高めカテゴリーを生成した。

その結果、高齢者のもつストレングスは、【訪問看護利用への希求】【介護保険への関心】【地域密着型病院への期待】【訪問看護の存在への安心と感謝】【家庭・地域の実情の情報発信力】【介護体験の仲間との共有】【率直な不安の表出】【世話役としての主体性】【元気になる島への愛着】であった。

今後は高齢者のもつストレングスを活かし、関係者を巻き込んだ連携を図り、訪問看護を実践していくことである。

I. はじめに

島嶼県沖縄には160の島々（うち39の有人離島）が点在するが、病院が立地する宮古島と石垣島、8,000人弱のA離島で、訪問看護ステーションは宮古島と石垣島のみであった¹⁾。A離島の住民は国民の義務として介護保険料は払っているが、島内で利用可能な医療・介護保険サービスが限られ、訪問看護の利用を望んでもA離島では選択できない理不尽さがあった。

A離島病院看護部は、方針のひとつに「働く仲間をはじめ、島の住民と相互に支え・支えられる関係づくり」を掲げ、「柔軟な発想で、離島の不利性を有利性に」、「ないものはない、しかし、できること

がある」という発想のもと、日々の看護実践を行っている。看護の役割拡大として、2013年から週1回、外来看護師による訪問看護（医療保険）を導入した。きっかけは、ドクターヘリでA離島から沖縄本島に救急搬送され治療中だった重症患者B氏の「生まれ島で最期を迎えたい」のひと言であった。退院時は余命1・2年と言われていたB氏は、8年が経過した現在でもA離島の自宅で暮らしている。一方、A離島出身者が沖縄本島で治療を受け、A離島に戻って最期の時間を家族や親戚、友人たちに囲まれ、馴染んできた島の風景や自然等の環境で過ごしたいと願っても、在宅看取りケアがいつでも可能な訪問看護がないことで、願いが叶えられない住民が出てき

受付日：2021年7月2日 採択日：2022年2月21日

1) 元公立久米島病院 Former Kumejima Public Hospital

2) 公立久米島病院 Kumejima Public Hospital

た。看護部では、「A離島で生まれ育ったから、最期まで島で暮らしたい」と願う住民の手助けをしたいとの思いを強くし、2019年10月にいつでも対応可能な訪問看護事業所（みなし指定）を開所した。

菊池²⁾は島嶼の看護職者は「島嶼住民の考えとその背景にあるものをよく知り、看護活動に住民を取り入れ、理解を促していくこと」の必要性を述べている。我々が訪問看護事業所開所にあたって大事にしたことは、専門職者の視点から訪問看護を実践するだけではなく、A離島で暮らす生活者の一人であることを認識し、住民（利用者本人・家族・周囲の関係者）の視点も加え、住民に寄り添える支援である。そこで我々は、小地域（字、集落）ごとに訪問看護事業所開所時の座談会を開催した。その目的は、訪問看護の内容・手続き等の情報共有、高齢者が訪問看護に求めているニーズの把握、高齢者が座談会でどのような意向や捉え方等をするのかを見出し、訪問看護の実践に活かすためである。

高齢化率約30%のA離島では、座談会形式がリラックスして対話ができると考えた。このような住民と専門職者が話し合うことの重要性について、森合³⁾は、「住民と話し合いながら知恵を絞り、地域への想い、将来への想いを語り合うことが重要である」ことを述べている。中澤⁴⁾は、「地域でできるだけ長く健やかに暮らす仕組みを作るためには、医療・介護サービスを利用する前の日常の段階で、健康の専門家に出会い、自身の健康に関心に向け、予防するきっかけを得たり地域の中でケアをしあえる環境を作ること」を提案している。そこで我々は、訪問看護事業所開所前から、関係機関・地区組織団体（役場、介護保険サービス事業所、ケアマネジャー連絡会、社会福祉協議会、区長会、婦人会等）と同時進行で、訪問看護を利用する可能性の高い高齢者を対象に座談会を企画・実施してきた。高齢者を対象としたのは、利用者として、または家族として、訪問看護の利用に最も近い存在と考えられること、過去の入院経験や介護体験等から自分事として身近に感じる事が出来ると推測したからである。

島嶼性の視点から、訪問看護開所時に高齢者との座談会を開催する意義は何だろうか。A離島のような狭小性のある島嶼では、高齢者本人や家族・親戚の血縁や隣近所等の地縁のつながりを含めた関係性の中で暮らしていることが多い。嘉数⁵⁾は、島嶼の狭小性のプラス面として、コンセンサスが得やすい、共同的紐帯、生活情報の共有を挙げ、大湾⁶⁾は、情報共有の容易性は、住民が目標の方向性や共に参加

する基盤をつくることを可能にすることを示唆している。島嶼の情報共有の容易性を活かし、新しいサービスである訪問看護が、口コミで住民に周知され、必要な時に必要な住民がいつでも利用できるしくみになることが期待できるため、高齢者サロンでの座談会を開催する意義があると考えた。

訪問看護に関する周知度の調査では、三浦⁷⁾は「在宅療養にかかるサービスを知っているが、通所介護82.5%、訪問介護77.4%に対して、訪問看護41.0%であり、住民の中で周知されていない」と報告している。A離島でも通所介護と訪問介護は既にサービスとしてあるため、新しい訪問看護の周知は低いことが予測された。また中澤⁸⁾は、「地域の住民は健康が最優先ではなく、日常生活に既に組み込まれているもの（農作業、グラウンドゴルフ等）の優先度が高い。住民の楽しさや関心事、優先度の高いものに乗って関わっていくことで馴染んでいくことができる。（中略）関係性が出てくると、ちょっと困っていることがあつてと相談に来るようになる」と述べている。先行研究も踏まえた上で、A離島において、高齢者に馴染みのある場として高齢者サロンに出かけ、訪問看護開所時の座談会を開催する必要性を感じた。

ところで、高齢者が座談会における訪問看護に関連する意向や捉え方等を見出すための手がかりとして、本稿ではストレングスの視点に着目した。ストレングスモデルは個人の持つ力に着目しそれをケアに生かすことを重視していること⁹⁾や、わが国では、地域における個人と環境（隣近所等）との相互関係のなかで個人をいかすストレングスがあること¹⁰⁾が指摘されており、高齢者等の住民同士の関係性が見出せると考えた。ストレングスとは、「個人およびその人を取り巻く環境がもっている強みのこと」¹¹⁾であり、その構成要素はRappら¹²⁾によると、個人としての能力、願望、自信、環境としての資源、社会関係、機会がある。本稿においては、訪問看護の利用に関する高齢者および高齢者をとりまく環境が持っている強みとした。

以上の背景から、高齢者が集まる小地域のサロンを座談会の場として応用し、高齢者の生の声（意見や質問等）を通して高齢者のストレングスを見出し、開所後の訪問看護の実践に役立てていく必要があると考えた。

本研究の目的は、A離島の高齢者のもつストレングスを明らかにし、そのストレングスを活かしたA離島で初めての訪問看護の実践への示唆を得ることである。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究協力者

A 離島内の高齢者サロン 15 ヶ所の座談会に参加した高齢者。

2. データ収集と分析

座談会には、我々（共同研究者3人）のうち1人または2人で参加し、前半20分を訪問看護の経緯や内容（申請手続き、在宅で医療行為が可能、訪問介護との違い、在宅看取りがやりやすくなること等）を説明し、後半20分は高齢者との質疑応答や意見交換を行った。データとして、高齢者から出てきた質問や意見等はその場でメモ書きをし、終了直後に加筆修正し、翌日までに報告書として文章化し、共同研究者間で確認した。データ収集期間は、2019年9月～2020年2月である。

その報告書から、高齢者の意見、質問等を抜き出した文章から、「研究者から捉えられる高齢者のもつストレングスは何だろうか」の問いをかけ、一文一義でキーセンテンスとして導き出した。そのキーセンテンスで類似した意味内容のものを集め、抽象度を高めサブカテゴリーとした。さらに、類似したサブカテゴリーを集め、抽象度を高めて、高齢者のもつストレングスとしてカテゴリーを生成した。分析過程では共同研究者間の一致を担保しながら合意が得られるまで進めた。

3. 倫理的配慮

研究協力者には開始前に、座談会や研究の目的や内容について説明し、口頭で意見・質問等をメモ書きすることの了解を得て、座談会での発言内容（意見・質問等）を訪問看護の実践や研究発表で使用するの了解を得た。データは個人や地域が特定されないようにID化し、個人情報保護に努めた。また、今回の座談会での意見・質問等は、今後の訪問看護の利用や病院受診等で不利益を被ることは無いことを説明した。

Ⅲ. 結果

1. 座談会および研究協力者の概要（表1）

A 離島にある高齢者サロン 21 ヶ所中 15 カ所（71.4%）で開催し、場所は1 ヶ所を除き小地域内にある公民館で、参加者は7～22人、計173人、平均の参加者は11.5人であった。

表1. 座談会および研究協力者の概要

サロン (ID)	参加者数	担当者数
A	12人	2人
B	15人	1人
C	11人	2人
D	8人	2人
E	14人	2人
F	8人	1人
G	10人	1人
H	22人	2人
I	20人	2人
J	10人	1人
K	7人	2人
L	8人	1人
M	11人	1人
N	7人	1人
O	10人	1人
計15ヶ所		計173人

2. 座談会で見出されたA 離島の高齢者のストレングス（表2）

座談会で見出された高齢者のストレングスとして、104のキーセンテンスから24のサブカテゴリー、9つのカテゴリーを抽出した。キーセンテンスは“ ”、サブカテゴリーは〈 〉、カテゴリーは【 】で示す。キーセンテンスの末尾の（ ）内のアルファベットは、サロンのIDを示す。

高齢者の意見・質問等からは、島内にはなかった訪問看護の基本的な情報として、“シャワー浴介助等、内容で料金が変わるのか（H）”等の〈訪問看護の利用料金はいくらか〉、“訪問看護は介護保険で使えるのか（L,M）等の〈訪問看護の利用方法を教えてほしい〉が見出された。また、“隣の一人暮らしのおばあちゃんの面倒をみているが、一人暮らしも担当するのか（F）等の〈訪問看護の対象を教えてください〉、“家で点滴もできるのか（A）”等の〈訪問看護の内容を教えてください〉が見出された。さらに、“訪問介護で風呂を入れたりするのに、訪問看護と何が違うのか（O）”等の〈訪問看護と訪問介護との違いは何か〉、“医者が訪問するのは違うのか（G）”等の〈訪問看護と訪問診療の違いは何か〉等から、カテゴリー【訪問看護利用への希

表2. 座談会で見出されたA離島の高齢者のストレングス

主なキーセンテンス	サブカテゴリー	カテゴリー
シャワー浴介助など、内容で料金が変わるのか (H) 介護度によって料金は違うのか (C) 寝たきりの人もいれば、歩ける人もいるが、かかる料金は違うのか (L)	訪問看護の 利用料金はいくらか	訪問看護利用への希求
訪問看護は介護保険で使えるのか (L) (M) 訪問看護を使う時にはどこに行ったらいいのか (C) 一人暮らしで電話がかけられない人はどうするのか? (B)	訪問看護の 利用方法を教えてほしい	
隣の一人暮らしのおばあちゃんの面倒をみているが、一人暮らしも担当するのか (F) 家から出られない人が対象か (E) これから年をとったら認知症も心配。認知症の人も対象か (E)	訪問看護の 対象を教えてほしい	
家で点滴もできるのか (A) 訪問看護師は、呼んだらすぐに来てくれるのか (H) 夜はどう対応するのか、連絡するのは何時からと決まっているのか (I)	訪問看護の 内容を教えてほしい	
訪問介護で風呂を入れたりするのに、訪問看護と何が違うのか (O) ヘルパーはよく利用しているので、訪問看護との違いで悩むかもしれない (A) デイサービスとデイケア、ヘルパーと訪問看護の違いは何か (F)	訪問看護と 訪問介護との違いは何か	
医者が訪問するのは違うのか (G) 医者の訪問 (訪問診療) は続けるのか (I)	訪問看護と 訪問診療との違いは何か	
介護保険の該当する人とならない人の違いは何か (A) 要支援の人も訪問看護を受けられるのか (H) 介護保険を受けていない人でも利用することはできるのか (K)	介護保険の対象は誰か	介護保険への関心
80・90歳になって何でもできる人がいるが、介護保険の申請はしていた方がよいのか (C) 介護認定を受けないでも訪問看護は使えるのか (G) 介護保険の手続きはどこでするのか (A)	介護保険の 手続きはどうするのか	
国民保険と介護保険の違いは何か (A) 介護保険と訪問看護とは関係ないのか (C) 介護保険と医療保険の両方を使うのか (E)	介護保険と 他の保険との違いは何か	
病院のリハビリで若い人が熱心に関わっているのを見て癒された (A) 病院への文句は去年まではあったが、今はない (A) 病院に送り迎えのサービスをしていることを聞いたことがあるが、今でもあるのか (N)	病院は以前より 良くなってきている	地域密着型病院への期待
(地域に) 病院にはあまり行きたくない人がいる (E) 地域の人たちが信用する病院になって欲しい (A)	地域が信用できる病院に なってほしい	
最近は孤独死が多くなっている (訪問看護のような) 家に回ってきてくれるのは助かる (M) 病院から看護師が家に来るなら、一人で寝ている年寄りにはホッと安心する (K) 一人暮らしが多いので、(訪問看護があれば) 何かあった時に助かる (A)	訪問看護があることで 安心でき、感謝する	訪問看護の存在への 安心と感謝
初めて訪問看護の話を開けて理解できた。鳥でできるだけ暮らしていけるようになる (E) 家族にも親戚にも、訪問看護があることをもっと知ってほしい (K) 訪問看護の説明で思いが伝わってきた感じがする (A)	訪問看護の良さが伝わる	
90歳を過ぎて体もだいたい弱くなってきているのに、「大丈夫」だと言ってサービスを利用しない人もいる (F) 地域には高齢者だけでなく、若い一人暮らしの人もいっぱい住んでいる (K) 昔は (鳥では面倒がみれず) 沖縄本島に預けたままだった (D)	地域の実情を教える	家庭・地域の実情の 情報発信力
自分の嫁には苦勞をかけたくない。さっさと向こう (あの世) に連れて行って欲しい (K) 嫁は頼りにならない (A)	家庭の事情を話す	
以前に家族が家で最期のときに訪問してもらって、最期まで看護師がいろいろやってくれたので助かった (N) 母親の時に1週間使ったことがあって、すごく助けられた。最後までちゃんと面倒をみてくれた (K) 隣の高齢者に食事の差し入れをしているが断られ、代わりにお菓子をあげている等の体験談を話す (F) 夫を介護した体験を話す (A)	看護師が最期まで訪問した 体験を話す 介護体験を話す	介護体験の仲間との共有
父が病院で亡くなったので心残りが残る (K) 母親の時に、医者と看護師と一緒に来ていた (訪問診療) (G) 自らの受診体験や救急車搬送体験を話し、病院のことを話題にする (A)	病院についての体験を話す	
今は夫婦二人だからいいけど、年をとって一人になったら不安 (D) 今は大丈夫だけど、これからどうなるかはわからない (K)	将来への不安を口にする	率直な不安の表出
みんな元気じゃないですよ。あっちこっち痛い (D) 始めに目から悪くなる、耳も遠くなっている (D) 年をとるにしたがって体も弱くなる (D)	衰えていく体について話す	
必要な時に急に利用するのではなく、日頃から看護師と顔見知りになったり、話をしていると利用しやすくなる (B) (訪問看護は) 体験しないとわからないので、必要な人はまずは使ってみる (B)	訪問看護利用の コツを教える	
(サロン代表) 今日の集まりのために各家庭を回って呼び掛けた (E) 字の行事や小学校運動会での高齢者バレーがあるのでぜひ見て下さいとの誘いあり (A)	地域での行事に 関係者を誘う	世話役としての主体性
島外に長男がいて「来ないか」と呼ばれるが鳥がいい (A) 私は沖縄本島には行かないよ、鳥が好きだから (D) 年をとると、施設よりも自分のお家で死にたい (K)	鳥が好き	
ずっと本島で入院していても、島の風景を見たら元気になる (E) 病気によっては本島で治療して、島に帰ってきたら元気になれる (E) 本人が病気を知らなくても、島の生活やリハビリ、食事でよくなるし、元気になると思う (E)	島では元気になれる	元気になる島への愛着

* キーセンテンスの末尾の (アルファベット) は、サロンのIDを示す

求】が見出された。

介護保険制度については、“介護保険の該当する人とならない人の違いは何か（A）”等の〈介護保険の対象は誰か〉、“80・90歳になって何でもできる人がいるが、介護保険の申請はしていた方がよいのか（C）”の〈介護保険の手続きはどうするのか〉、“国民保険と介護保険の違いは何か（A）”等の〈介護保険と他の保険との違いは何か〉の要望等から、カテゴリー【介護保険への関心】が見出された。

病院・訪問看護に関わることとして、“病院のリハビリで若い人が熱心に関わっているのをみて癒された（A）”等の〈病院は以前より良くなってきている〉、“地域の人たちが信用する病院になってほしい”の〈地域が信用できる病院になってほしい〉の意見・要望等から、カテゴリー【地域密着型病院への期待】が見出された。

訪問看護に対しては、“最近孤独死が多くなっている（訪問看護のような）家に回ってきてくれるのは助かる（M）”等の〈訪問看護があることで安心でき、感謝する〉、“初めて訪問看護の話を聞いて理解できた。島でできるだけ暮らしていけるようになる（E）”等の〈訪問看護の良さが伝わった〉の意見から、カテゴリー【訪問看護の存在への安心と感謝】が見出された。

地域に関連しては、“90歳を過ぎて体もだいたい弱くなってきているのに、大丈夫だと言ってサービスを利用しない人も（F）”等の〈地域の実情を教える〉、“自分の嫁には苦勞をかけたくない。さっさと向こう（あの世）に連れて行って欲しい（K）”等の〈家庭の事情を話す〉の意見から、カテゴリー【家庭・地域の実情の情報発信力】が見出された。

過去の体験として、“以前に家族が最期のときに家に訪問してもらって、最期まで看護師がいろいろやってくれたので助かった（N）”等の〈看護師が最期まで訪問した体験を話す〉、“隣の高齢者に食事の差し入れをしているが断られ、代わりにお菓子をあげている等の体験談を話す（F）”等の〈介護体験を話す〉、“父が病院で亡くなったので心残りがある（K）”の〈病院についての体験を話す〉の話題から、【介護体験の仲間との共有】が見出された。

高齢者の現状から“今は夫婦二人だからいいけど、年をとって一人になったら不安（D）等の”〈将来への不安を口にする〉、“みんな元気じゃないですよ。あっちこっち痛い（D）等の”〈衰えていく体について話す〉の話題から、カテゴリー【率直な不安の表出】が見出された。

“必要な時に急に利用するのではなく、日頃から看護師と顔見知りになったり、話をしていると利用しやすくなる（B）”等の〈訪問看護利用のコツを教える〉、“今日の集まりのために各家庭を回って呼び掛けた（E）”等の〈地域での行事に関係者を誘う〉の意見から、カテゴリー【世話役としての主体性】が見出された。

島で暮らし続けることに関して、“私は沖縄本島には行かないよ、島が好きだから（D）”等の〈島が好き〉、“病気によっては本島で治療して、島に帰ってきたら元気になれる（E）等の”〈島では元気になれる〉の意見から、カテゴリー【元気になれる島への愛着】が見出された。

IV. 考察

1. A離島の高齢者のストレングスとしての「つながり」の豊かさ

A離島で座談会に参加した高齢者のストレングスとして、個人レベルにとどまらず、周りの環境（地域）とのつながりを含んだ多様なストレングスが見出された。A離島の特徴として、社会人類学者の比嘉¹³⁾は、「人びとの日常生活での人間関係の網目は、血縁・地縁がからみ、また、最近まで村落結婚が多かったもので、親族関係は多層的で濃縮したものとなっている」ことを指摘している。大湾¹⁴⁾は、「島しょ地域の過去も現在も、人と人とのつながりが広くて深く、助け合い、支え合って共に生きている。そこで暮らす人々の力を借り、地域で育まれる互助に関わる実践の力強さに着目することが求められている」と指摘している。A離島においても、看護職者は地域の人と人とのつながりや互助に着目し、高齢者の力を借りていく必要があると考える。

個人レベルのつながりのストレングスとして、【介護体験の仲間との共有】が見出された。大口ら¹⁵⁾は、ルールエリア（豪雪地帯）での高齢者のストレングスとして、「過去の体験から得られた自信があり、長年の生活の中で学び、体験し苦難を乗り越えてきたことによる自信を身につけていた」ことや、「地域の中での長年の伝統や会の運営に携わってきた自信と誇りを有していたことから、高齢者のストレングスは過去の様々な体験の積み重ねから現在の自信が形成されている」ことを報告している。A離島の高齢者においても、過去の介護体験を仲間と共有できる自信や誇りを有していると思われる。意図的に高齢者と会う機会をつくって、高齢者から介護体

験を聴くことで、本来もっているストレングスを活かすことにつながると考える。

続いて、今回、カテゴリーとして【世話役としての主体性】が見出されたことは、A離島には他者のために地域のために世話を焼ける利他性をもつ世話役の高齢者が含まれていることが推察される。野口¹⁶⁾は、「グローバル化の影響を受けて失うのは、身近に暮らす人々の共感と利他主義の発揮であり、相互扶助がもたらす安心、心地よさである」と述べているが、A離島の高齢者には、利他性や相互扶助の精神があることが伺える。また狭間¹⁷⁾は、ストレングスは、「個人だけでなく、家族などの集団・コミュニティも保有するとされる資源という意味をもつ」ことを述べている。高齢者はケアの対象と捉えるだけでなく、地域でのケアにつながる・つなげる資源としても捉え、共にケアを創っていく人として位置づけていくことが、A離島のように高齢化率が高い島嶼では特に大事な視点と考える。大湾¹⁸⁾は、「知恵もちの高齢者たちは、島の豊かさとは、ものの豊かさではなく、人の豊かさという光の面を多く語っていた」と述べている。世話役になる高齢者は、「自分とつながる他者を多様に把握しており、ネットワークの紐帯の結節点にいる¹⁹⁾」ことや、「家族や仲間との交流から得てきた自信、地域文化の伝承や交流活動の世話役を引き継いできた自信と誇りを有し、自己実現と社会貢献の力を発揮していた²⁰⁾」ことが報告されている。世話役やサロンに参加していた高齢者たちのように島嶼の高齢者のもつ人としてのつながりの豊かさを地域ケアに活かしていく必要がある。

さらに高齢者からは、<島では元気になれる>と<島が好き>の【元気になれる島への愛着】が見出された。島嶼の高齢者の背景にあるものとして、下地²¹⁾は宮古島の高齢者の地域に住み続ける意味として、「配偶者との死や子どもたちとの物理的な距離が広がる中で、友人や隣人からの情緒的な支えが幸福感に大きな影響を及ぼすものと考えられる。実際に、生まれ育った島に対する愛情や信頼感が高まるばかりでなく、精神的な安心感や住み続けることそのものが生きる自信につながっている」と述べているが、A離島の高齢者たちも同様な傾向があるのかもしれない。A離島出身で島外に入所しているA離島出身者の「島に帰りたい」「島で最期を過ごしたい」は、単なる個人の家という自宅のみの範囲ではなく、自宅のある小地域やA離島全体を含めて家や島として広く捉えていると思われる。

2. 座談会での高齢者のストレングスを活かした訪問看護への示唆

今回、座談会に参加した高齢者から、A離島では新しいサービスである【訪問看護利用への希求】や【介護保険への関心】をもっていること、【介護体験の仲間との共有】が見出されたことは、高齢者を巻き込んだ訪問看護を実践していける可能性が示唆される。そして、高齢者のストレングスとしての「つながり」の豊かさを今後の訪問看護の実践で活かしていく必要がある。野口²²⁾は、「島しょ保健看護の高度実践に求められていることは、グローバル化が進む現代の特徴になじみにくい島しょの弱みに屈せず、島しょの強みに基盤を置くことである。島しょの強みとは、互いに助け合って、島に住み続けたいと共に思っている、文化のもつつなげる力であり、それを活かすことである」。また、コミュニティナースとして活動する中澤²³⁾は、「看護師がもつアセスメントの視点やコミュニケーション能力など、ケアと医療機関という特別な場所に閉じ込めず、まちの様々な場所で、多様な分野の人と活かすことができるよう、その土地にあった地域の中での看護実践」の必要性を述べている。石垣²⁴⁾は島嶼の地域看護活動の展開方法として、「固定観念にとらわれず、住民・専門職すべてを多様な役割の担い手として活用・連携する」ことを導き出している。これらは専門職者との連携にとどまらず、地域の住民を含めた多種多様な連携として捉えることができる。A離島での連携においても、地元だからこそ知っている【家庭・地域の実情の情報発信力】がある高齢者がおり、【世話役としての主体性】が示唆されたことから、看護職者と住民との小地域に根差した連携の可能性がみえてくる。

また、【元気になれる島への愛着】が話題になったように、A離島が好きで最期まで住み続けたいと願う高齢者や、【地域密着型病院への期待】、【訪問看護の存在への安心と感謝】のように、安心・感謝の念を抱いている高齢者を、地域で共にケアする仲間、連携する仲間として巻き込める可能性があると考え。高齢者を巻き込むことで、都市部に比べて一見、資源が足りないように見えるが、インフォーマルサポートを活かすことで地域連携の可能性が見えてくる。

大湾²⁵⁾は、「島しょでは医療と介護の連携は、狭小性が幸いして、すぐに会えることから協働連携が容易である。生活支援と予防は公助・共助による活動の場は多くはないが、伝統行事や地域行事などの

ほか、日常的に出会う機会が多く、顔見知りも多いため、つながり助け合いの機会が確保しやすい有利性があることを看護職者が意識化しておくことで、地域連携に活かせると考える」と述べている。また、野口²⁶⁾は、「島嶼では人々とともにケアをつくり、それによって島が育つ。それができる土壌が島にはあり、その土壌で育つ看護は貴重である」と述べ、住民を巻き込んだケアの豊かさに期待している。さらに、島嶼における看護実践として、「地域ケアは、ケアを地域で実践することではなく、地域によるケアであり、地域に対する看護活動である」と述べ、「病院は、人々の願いを実現できるように努力し、地域の人々は、自分たちの病院を愛し、改善のための意見を述べる。地域の人々が利用しやすく、参加しやすくするために、垣根低くすることで地域の病院となれる」と述べている。資源としての各小地域での世話役の高齢者を把握し、本人・家族の意向も踏まえた上で、訪問看護と世話役との連携を模索していくことが必要になってくると考える。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、A離島の全ての高齢者サロンの座談会を開催できなかったこと、本研究の結果は、座談会での質疑応答や意見交換から研究者が見出した高齢者のもつストレングスであり、高齢者自身に直接ストレングスについてインタビューして得られた結果ではなかったことである。今後は訪問看護を利用した当事者（利用者本人、その家族）の生の声を聞き、当事者の視点から捉えた高齢者や訪問看護師のストレングスを明らかにすることである。

V. おわりに

本研究は、A離島で初めての訪問看護開所時の座談会における高齢者のもつストレングスを見出し、そのストレングスを活かした訪問看護の実践への示唆を得た。高齢者のストレングスは、【訪問看護の利用への希求】、【介護保険への関心】、【地域密着型病院への期待】、【訪問看護の存在への安心と感謝】、【家庭・地域の実情の情報発信力】、【介護体験の仲間との共有】、【率直な不安の表出】、【世話役としての主体性】、【元気になれる島への愛着】であった。

今後の方向性は、見出した高齢者のもつストレングスを活かして、訪問看護の対象を捉え、周囲の関係者を巻き込んだ連携を図って、訪問看護を実践していくことである。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、訪問看護事業所開所に向けた座談会に参加し研究に協力していただいたA離島の高齢者の皆さまに感謝申し上げます。

本研究は、日本ルーラルナーシング学会第15回学術集会において一部を発表した。

本研究において申告すべき利益相反状態はない。

引用文献

- 1) 沖縄県企画部地域・離島課：離島関係資料 令和3年3月118, 2021.
- 2) 菊池友美：島嶼住民の求める離島看護職者の役割，看護教育，49(8):704-708, 2008.
- 3) 森合真由美：健康な地域づくりと住民とともに歩む，保健婦雑誌57(8):585-589, 2001.
- 4) 中澤ちひろ：コミュニティナースで広がる地域での看護実践 暮らしの中から日常の健康づくりを，文化看護学会誌，11(1):67-69, 2019.
- 5) 嘉数啓：島嶼学への誘いー沖縄からみる「島」の社会経済学，岩波書店(東京)，pp36, 2017.
- 6) 大湾明美：島に学ぶ地域ケア 高齢者の豊かな人生を創る発想の転換，オフィス・コオリノ(東京)，pp65, 2021.
- 7) 三浦まゆみ，工藤朋子：訪問看護ステーション未設置のA保健所管轄地域住民が捉える在宅サービス，岩手県立大学看護学部紀要，19:33-44, 2017.
- 8) 前掲書5) 67-69.
- 9) Charles A. Rapp, Richard J Goscha/田中英樹監訳，ストレングスモデル；リカバリー志向の精神保健福祉サービス(第3版)，金剛出版(東京) pp59, 2014.
- 10) 神山裕美：ストレングスの視点の活用と展開ー地域における高齢者の介護予防と生活支援を通してー，山梨県立大学人間福祉学部紀要，2:19-30, 2007.
- 11) 佐久川政吉，大湾明美，宮城重二：高齢者ケアにおけるストレングスの概念，沖縄県立看護大学紀要，11:65-69, 2010.
- 12) 前掲書9)，pp45-66.
- 13) 比嘉政夫：沖縄の家族と親族，沖縄の親族・信仰・祭祀ー社会人類学の視座からー，榕樹書林(沖縄)，pp120, 2010.
- 14) 大湾明美，野口美和子：島しょ看護研究をどう進めるか その方法と実際，看護教育，53(2)，

- 142-148, 2012.
- 15) 大口洋子, 原等子, 小泉美佐子: 豪雪地帯に暮らす後期高齢者のストレングスの検討, 日本ルーラルナーシング学会誌, 14:1-13, 2019.
- 16) 野口美和子: 未来の世界の地域づくりへのチャレンジー文化看護学会第9回シンポジウム「地域文化のケア力」を終えてー, 文化看護学会誌, 10(1):107, 2018.
- 17) 狭間香代子: 社会福祉の援助観ーストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント, 筒井書房(東京), pp121-122, 2001.
- 18) 前掲書6), pp 5.
- 19) 小玉敏江, 森千鶴, 佐藤みつ子: 老人クラブの高齢者における世話役の特性, 日本保健福祉学会誌, 15(2):1-11, 2009.
- 20) 前掲書15), 9-10.
- 21) 下地敏洋: 宮古島における地域文化行動幸福感, 文化看護学会誌, 10(1):95, 2018.
- 22) 野口美和子, 大湾明美: 「島しょ保健看護学」の確立の必要, 看護教育, 52 (11), 942-947, 2011.
- 23) 前掲書4), 67-69.
- 24) 石垣和子, 野口美和子, 大湾明美, 他: 島嶼における地域看護活動の展開方法に関する研究, 日本ルーラルナーシング学会誌, 11:34, 2016.
- 25) 前掲書6), pp215.
- 26) 前掲書22), 944.

島嶼地域における高齢者の「地域によるケア」にみる互助の機能

The Function of Mutual Aid in "Care by the Community" for older adults on Islands

田場由紀¹⁾, 大湾明美¹⁾, 山口初代¹⁾, 砂川ゆかり¹⁾, 宮里智子¹⁾, 西平朋子¹⁾
Yuki Taba¹⁾, Akemi Ohwan¹⁾, Hatsuyo Yamaguchi¹⁾, Yukari Sunagawa¹⁾,
Tomoko Miyazato¹⁾, Tomoko Nishihira¹⁾

キーワード：島嶼, 互助の機能, 高齢者, 地域によるケア

抄録

本研究の目的は、島嶼地域における地域住民が実践している「地域によるケア」を見出し、互助（住民同士、またはボランティアによる助け合い）の機能について考察することであった。フィールドは地域活動を把握した8島、研究協力者は行政担当者4名、看護職4名、住民11名であった。データの収集は面接にて地域活動の内容や取り組みプロセスを聞き取り、分析は「互助はどのような機能を発揮しているのか」に焦点をあてて行った。倫理的配慮として、研究への協力は自由意思によること、個人情報保護は保護されることなどを説明し同意を得た。8島の互助による地域活動は16事例把握された。地域活動から見出された互助の機能は、【世話し世話される活動の積み重ねで住民による助け合いの風土へ貢献】、【高齢者に馴染む活動で楽しみの醸成】、【「島で暮らす」を生きる交流の促進】、【「住民同士で支え合う」を継承する地域づくり】であった。互助の機能は、伝播し、自助を高め、当事者の関与によって発展することが示唆された。

I. はじめに

我が国の高齢者ケアは、これまでの自助・共助・公助の組み合わせに、互助を加え、地域の実情に応じて、それぞれの機能を活かした地域包括ケアシステムの構築・深化をめざしている。その互助の機能は、介護予防・生活支援に期待が寄せられている。

互助とは何か。恩田¹⁾は、互助について、他者との行為の交換であり、双方向の志向性をもつと説明、「互助行為は「助力」をもって他者に対して働きかける、あるいは他者を必要とする社会的行為」と定義している。また、白澤²⁾は、社会資源の供給主体として自助・互助・公助を分類し、互助とは親戚、友人・同僚、近隣、ボランティアによるサポートと定義している。そして、地域包括ケアを推進する地域包括ケア研究会³⁾は、自助・互助・共助・公助をその行為の主体と機能から定義している。互助については「インフォーマルな相互扶助」とし、近隣や

ボランティアによる助け合いとしている。互助の機能は、公助や共助の代替えとして高齢者の支援を担うという手段としての機能^{4) 5)}と、支えられながら担い手となることにより、高齢者の参加を促進し、生きがいになるという目的としての機能^{7) 8)}についての報告がある。このことは、互助の機能は、超高齢社会においてケアの担い手と高齢者自らの生きがいの醸成の観点からその活用を図っていく必要性があると考ええる。

ところで、広い海域に39島の有人離島を有する沖縄県は「公助」として、介護保険制度施行時には、「保険あってサービスなし」の事態を回避するために、様々な工夫を凝らしてきた。例えば、人口千人未満の小離島であっても診療所があることを活かして居宅療養管理指導や訪問看護のみなし指定を実施し、最低限の介護保険サービス確保に努めてきた⁹⁾。また、島々に講師を派遣して出張型でヘルパーを養

受付日：2021年7月7日 採択日：2022年2月23日

1) 沖縄県立看護大学 Okinawa prefectural college of nursing

成してきた¹⁰⁾。しかし、「共助」としての介護保険サービスは脆弱で高齢化率、介護認定率が高く、独居高齢者の割合の高い小離島では「自助」への期待も薄い。このように、公助・共助・自助の組み合わせだけでは、高齢者の課題を解決することは困難であった。大湾¹¹⁾は、その課題解決に向けて、波照間島の「互助」の高さに着目し、互助の機能を活性化させ、高齢者の地域ケアを誕生させた。それは、小離島における地域ケアは「互助」の機能を活かして公助・共助・自助を補うことを示しており、我が国のめざす地域の実情の応じた地域包括ケアの構築・深化に向かっている事例といえる。

地域包括ケア、とりわけ地域ケアについて考察したM. Bayley¹²⁾は、‘Care out of Community’ ‘Care in the Community’ ‘Care by the Community’の段階があると述べている。‘Care by the Community’すなわち、「地域によるケア」は、最も高いレベルの地域ケアであり、専門職だけでなく地域住民とともにケアを創造することとしている。島嶼地域は、環海性、狭小性、孤立性という特徴から、地域住民が顔の見える関係であることから、互助の機能を活かした「地域によるケア」を創造する基盤があり、その実践が見いだせると考えた。

そこで、本研究の目的は、島嶼地域における地域住民が実践している「地域によるケア」を見出し、互助（住民同士、またはボランティアによる助け合い）の機能について考察する。

なお、本研究における「地域によるケア」は、住民同士による助け合いまたは住民のボランティアによる高齢者のための活動、つまり互助による地域活動とした。

Ⅱ. 研究方法

1. フィールドの選定

対象候補とした離島は、沖縄県が平成23年発行した「沖縄における今後の離島振興策に関する調査報告書」¹³⁾による離島類型化から“遠の島”（孤立型離島であり拠点島と距離があり、自立性を有する島）と、“近”の島（近距離型離島であり中核となる島から近いが、ある程度の機能を持ち自立性を有する島）とした。39島中“遠”の島は11島、“近”の島は10島の合計21島とした。そのうち、互助による地域活動が把握できたのは“遠”の島6島、“近”の島2島の合計8島であった。人口は、最小で約500人、最大で5,000人であった。高齢化率は、最も低い島で約17%、最も高い島は約45%であった。

2. 研究協力者の選定

互助による地域活動について、各島の地域包括支援センターを通じて、その活動について詳しい者の紹介を得て、面接協力候補者とした。面接協力候補者に対し、電話及び面談により研究の趣旨を説明、同意の得られたものを研究協力者とした。研究協力者は、行政担当者4名、看護職4名、住民11名であった。

3. データの収集

データの収集は、2018年12月～2019年3月の期間に面接にて実施した。調査項目は、互助による地域活動の内容、きっかけ、取り組みプロセスとその活動における研究協力者の評価であった。面接内容は研究協力者の同意を得てICレコーダーに録音、逐語録を作成した。

4. データの分析

逐語録を精読し、互助による地域活動の概要として活動のきっかけ、活動の基盤づくり、活動の実際を整理し活動ごとの個票を作成した。

次に、逐語録から「互助はどのような機能を発揮しているのか」に焦点をあて、質的帰納的方法で分析した。キーセンテンスは“ ”、サブカテゴリーは《 》、カテゴリーは【 】で示す。

5. 倫理的配慮

面接協力候補者には、研究の趣旨と内容、方法を説明し、参加は自由意思によること、同意後も同意の撤回が可能であることを説明した。また、面接内容に関連する個人情報（個人名、地区名、そのほか個人が特定される情報）は、記号化、匿名化することなど、個人情報保護されることを文書と口頭で説明し、同意を得た。なお本研究は研究者の所属する機関における研究倫理審査委員会を受審し2018年9月18日に承認を得て実施した（承認番号：15016-変更1）。

Ⅲ. 結果

8島の互助による地域活動は16事例把握された（表1）。互助による地域活動の概要は、ひとりの高齢者の困りごとや危機感をきっかけとした活動（A-1, D-4, F-8）、地域の課題を捉えた住民による行政への提案をきっかけとした介護予防活動（B-2, E-5, H-14）、介護予防活動から派生した楽しみの活動（E-6, E-7, H-15, H-16）、自分たちが楽しむため

表1. 互助による地域活動の概要

離島類型	島	人口	高齢化率	活動ID	互助による地域活動の概要
近 の 島	A	約5,000人	約27%	A-1	おしゃべり好きな認知症高齢者が、知人宅で昼夜を問わず長居をしてしまうという課題に対し、仲間と定期的におしゃべり会をしようと民生委員が提案し協力者を得て、定期的にサロンを開催している
				B-2	民生委員が、高齢者の行き場を作りたいと行政に相談したことをきっかけに、住民主体の活動として百歳体操の立ち上げと運営、高齢者と世話役がともに参加者になるよう工夫し継続実施している
	C	約500人	約30%	C-3	老人会への入会を拒否している女性らがサークルを立ち上げ、趣味活動として地域の美化活動に着手、閉じこもりがちな高齢者宅の前に植栽し、世話を依頼することで介護予防へ貢献している
	D	約1,200人	約26%	D-4	自宅の老朽化により転居を余儀なくされる地域の高齢者の課題に対し、区民全員で話し合い、共同売店を立ち上げた経験を生かし、共同アパートの建築に着手している
遠 の 島	E	約1,600人	約29%	E-5	百歳体操に取り組んだことで膝関節変形症が改善した住民を、ほかの住民が世話役として行政へ推薦し、住民主体の活動として百歳体操教室の立ち上げと運営、継続を実施している
				E-6	百歳体操教室の参加者に対し、世話役から島の行事へ余興で参加することを提案し、高齢者主体の踊りサークルを立ち上げ、継続している
				E-7	百歳体操教室のメンバーで、レクリエーションなど交流を楽しむための資金の確保を話し合い、高齢者の提案で定期的に集まり定額を積み立てる模をおこし、ドライブや旅行を企画、実施している
				F-8	踊りの伝承者である高齢女性が、若い婦人への継承に危機感を伝えたところ、婦人会の話し合いで、週2回の伝承活動が企画、提案され、高齢女性を講師として定期的に実施、継続している
	F	約900人	約34%	F-9	踊りの伝承活動の合間に婦人会活動について話し合ったことから、島唐辛子を用いた特産品のアイデアが生まれ、島の企業と協働で商品を開発、島唐辛子の生産活動に高齢者が参加し、高齢者の就労を促進している
				G-10	島での運動習慣を確立したい島民有志らが、家庭で使用されていない健康器具の持ち寄りを島民へ提案したところ、多くの器具の提供を受け、公共施設に常設し、簡易的な持ち寄りジムを開設、運営している
				G-11	民生委員が、健康で元気な高齢者らが行き場がなく、活動が少ないことを課題と感じ、農業の知識を活かして、場所と手入れの不要な島唐辛子の生産を提案、組合への出荷ルートを確認し就労を支援している
	G	約1,200人	約26%	G-12	島の有志が、ひとり暮らし高齢者に対し、持ち寄りのカフェを提案し、公共施設を利用して定期的に開催、参加者による持ち寄りのため、費用がかからず、高齢者はできることで運営に参加し、継続している
				G-13	島の有志の企画で、高齢者が畑で余らせている野菜を販売するための市場を定期的に開催、高齢者宅に野菜を取りに行き、会場で販売、売り上げを高齢者へ届けることで、島の資源の循環に挑戦している
				H-14	民生委員として島の高齢者の世話をするため百歳体操の世話人を引き受け、近隣にサポートを依頼しながら実施、体操の参加者を増やし、高齢者を世話する仲間を増やすことを意図して継続している
	H	約1,700人	約19%	H-15	老人会の休会で実施されなくなったグラウンドゴルフを、体操教室のメンバーのレクリエーション活動として開始し、体操教室に参加していない高齢者にも呼びかけ、定期的にグラウンドゴルフ交流会を開催している
				H-16	若い婦人の世代が、島の暮らしの知恵を学ぶため、地域の高齢者を講師として、野草を学ぶ会、大正琴を学ぶ会などを企画、世代間交流を実施している

の活動（C-3）、住民のアイデアをきっかけにした活動（F-9、G-10、G-11、G-12、G-13）があった。これらの地域活動に見出された互助の機能は、【世話し世話される活動の積み重ねで住民よる助け合いの風土へ貢献】、【高齢者に馴染む活動で楽しみの醸成】、【島で暮らす」を生きる交流の促進】、【住民同士で支え合う」を継承する地域づくり】であった。（表2）

1. 世話し世話される活動の積み重ねで住民よる助け合いの風土へ貢献

《「他者を世話する」機会を得て、その役割で楽しむ》では、“体操教室やサロンなど交流活動でのボランティアとなって、「暗くなるのが早くなって帰りの高齢者の足元が心配」など課題に気づいたら冬時間と夏時間を設定するなど、その都度対処を工夫するようになった（36-E-7）”，“百歳体操の世話役を時々お願いする隣人には、負担にならないよう機械の操作だけを依頼していたが、隣人は回数を重ね

るうちに体操のビデオを流すだけではなくレクリエーション活動も取り入れるなど高齢者を楽しませる工夫をした(19-H-14)”などがあった。

《活動を通して「世話し世話される」関係を醸成する》では、“民生委員として、「高齢者の通いの場をつくりたい」と行政に相談したところ、百歳体操を勧められ、その実施方法は住民に委ねられたので、住民同士で話し合い、通いの場が実現した(103-B-2)”, “これまでグランドゴルフをする場所は老人会が手入れしていたが、休会となり、あれ放題になっていた広場を、島の勉強会や体操教室の仲間で草刈りをしてグラウンドゴルフができるよう整備した(7-H-15)”などがあった。

《世代間交流や世話する体験を促し、助けあいの風土を育む》では、“前期高齢者の女性達は、島の人材をも講師として活用するほか、島外の老人福祉センターの趣味活動も情報収集し、それを模倣し楽しんだ(106-C-3)”, “体操教室には、ボランティア仲間が複数いるので、盛り上げ役や方言で応答できるなどの得意なことは、高齢者の多様なニーズに対応しているので、得なことでそれぞれが助けあった(34-E-5)”などがあった。

《行政の力も借り、住民に馴染む活動の場を拡げる》では、“私(住民)は、膝関節変形症が改善した体験を一人の高齢者に語ったら、それが噂となり、行政が行う体操教室に盛り込まれ、そこで、ボランティアとして役割を担うことになった(26-E-5)”, “自宅で寝ている健康器具の再利用のために無償提供を依頼したら、たくさんの器具があつまったので、行政に設置場所を相談し、老人福祉センターの一角に器具が設置され、住民が自由に利用できるトレーニングジムにした(63-G-10)”などがあった。

2. 高齢者に馴染む活動で楽しみの醸成

《交流を目的とする活動で楽しさを引き出す》では、“島のイベントに体操教室の仲間でチームをつくり、踊りを披露したら、楽しく生きがいになったとお礼を言われた(43-E-6)”, “島の唐辛子を使用した特産品は、婦人会により販売ルートが確保されているので、高齢者が原材料(唐辛子)を育てる楽しみが増え、島の小さな経済活動にも貢献した(99-F-9)”があった。

《高齢者のできそうなことを見つけ、生産活動への参加を促進する》では、“唐辛子の栽培は簡単であるが、出荷の作業に手間暇かかるので、若者より高齢者に向いており、民生委員の私は、地域の高齢

者に勧め、生産者を増やした(79-G-11)”, “若者たちは、高齢者の作った野菜を洗ったり値札をつけたりして商品となるまでの工程を補佐し、販売売り上げを高齢者へ還元した(71-G-12)”があった。

《できないことを補いながら、高齢者が楽しみ、無理なく参加できる活動を見いだす》では、“若者らが始めた野菜の販売への参加を重ねるうちに、高齢者は野菜を洗ったり、束ねたり、できることを増やした(73-G-11)”, “私(住民)が開催しているひとり暮らしの持ち寄りカフェでは、行政が企画する活動とは異なり、高齢者たちは「お客さん」ではなく、持ち寄りという自覚で、高齢者たちは率先して会場づくりなどできることをしてくれた(75-G-13)”があった。

3. 「島で暮らす」を生きる交流の促進

《島の暮らしの継続に向け課題に取り組む》では、“おしゃべり会は、一人のおしゃべり好きの方が認知症になり、昼夜を問わず知人の家に長居をして対応に困っていたので、定例で公民館に集まり、おしゃべりを楽しもうと民生委員から提案され、知人から協力が得て開始した(1-A-1)”, “トレーニングジムの発起人は、過去に島の飲酒習慣を改善した(ノンアルコールビールを取り入れた)成功体験があり、運動習慣もつくれることを期待し仲間たちと取り組んだ”(65-G-10), “自治会は過去に島内移住希望者のアパートを確保した経験があり、地元の高齢者が家屋の老朽化により、住居を失い、島外へ転出せざるを得なかったという課題に直面したとき、高齢者のためのアパート建設に、取り組み、住民の理解も得られた(104-D-4)”などがあった。

《活動が定着・波及することにより交流を拡げる》では、“島の伝統行事を継承するために、定期的に集まる機会がつけられ、参加した婦人たちは、婦人会活動について話し合う機会にもなり、新しい島の特産品が共同開発され、婦人会活動が活発化した(108-F-8)”, “美化活動に取り組んでいた婦人達のサークルは、引きこもりがちな高齢者の自宅前にも植栽活動を拡げ、水撒きを依頼したことで、外出のきっかけとなり、通行人との会話や井戸端会議が行われた(112-C-3)”などがあった。

4. 「住民同士で支え合う」を担い継承する地域づくり

《高齢者との関わり方を内省し、住民との支え合う意識を呼び覚ます》では、“ボランティアとして

島の高齢者の世話をするより、高齢者をその気にさせることは、難しいので、高齢者の力を引き出しできることをしてもらうことを心がけた（2-A-1），“島の高齢者は、長い間島で生活してきたので、皆で支え合うとか、ルールを守ることに慣れているが、リーダーとしての役割は取りたがらないので、新しい活動のリーダーは婦人会が補った（86-E-6）”があった。

《活動の継続と地域の発展のための役割を模索する》では、“唐辛子の生産・出荷は高齢者の就労として定着し、加工にも参入したいので、そのリーダーを引き受ける高齢者を探した（85-G-11）”，“世話役としての活動を見直す機会が必要であり、他の地域で実施されている世話役やボランティアと情報交換したいので、そのつなぎ方を探した（52-E-5）”などがあった。

表2. 地域活動から見出された互助の機能

ID	キーセンテンスの例	サブカテゴリー	カテゴリー
36-E-7	体操教室やサロンなど交流活動でのボランティアとなって、「暗くなるのが早くなって婦人の高齢者の足元が心配」など課題に気づいたら冬時間と夏時間を設定するなど、その都度対処を工夫するようになった	「他者を世話する」機会を得て、その役割で楽しむ	世話し世話される活動の積み重ねで住民よる助け合いの風土へ貢献
19-H-14	百歳体操の世話役を時々お願いする隣人には、負担にならないよう機械の操作だけを依頼していたが、隣人は回数を重ねるうちに体操のビデオを流すだけではなくレクリエーション活動も取り入れるなど高齢者を楽しませる工夫をした		
103-B-2	民生委員として、「高齢者の通いの場をつくりたい」と行政に相談したところ、百歳体操を勧められ、その実施方法は住民に委ねられたので、住民同士で話し合い、通いの場が実現した	活動を通して「世話し世話される」関係を醸成する	
7-H-15	これまでグランドゴルフをする場所は老人会が手入れしていたが、休会となり、あれ放題になっていた広場を、島の勉強会や体操教室の仲間と草刈りをしてグラウンドゴルフができるよう整備した		
106-C-3	前期高齢者の女性達は、島の人材をも講師として活用するほか、島外の老人福祉センターの趣味活動も情報収集し、それを模倣し楽しんだ	世代間交流や世話する体験を促し、助け合いの風土へ貢献する	高齢者に馴染む活動で楽しみの醸成
63-G-10	自宅で寝ている健康器具の再利用のために無償提供を依頼したら、たくさんの器具があつまったので、行政に設置場所を相談し、老人福祉センターの一角に器具が設置され、住民が自由に利用できるトレーニングジムにした	行政の力も借り、住民に馴染む活動の場を拡げる	
43-E-6	島のイベントに体操教室の仲間でチームをつくり、踊りを披露したら、楽しく生きがいったとお礼を言われた	交流を目的とする活動で楽しさを引き出す	
99-F-9	島の唐辛子を使用した特産品は、婦人会により販売ルートが確保されているので、高齢者が原材料（唐辛子）を育てる楽しみが増え、島の小さな経済活動にも貢献した		
79-G-11	唐辛子は栽培は簡単であるが、出荷の作業に手間暇かかるので、若者より高齢者に向いており、民生委員の私は、地域の高齢者に勧め、生産者を増やした	高齢者のできそうなことを見つけ、生産活動への参加を促進する	「島で暮らす」を生きる交流の促進
73-G-12	若者らが始めた野菜の販売への参加を重ねるうちに、高齢者は野菜を洗ったり、束ねたり、できることを増やした	できないことを補いながら、高齢者が楽しみ、無理なく参加できる活動を見いだす	
75-G-13	私（住民）が開催しているひとり暮らしの持ち寄りカフェでは、行政が企画する活動とは異なり、高齢者たちは「お客さん」ではなく、持ち寄りという自覚で、高齢者たちは率先して会場づくりなどできることをしてくれた		
1-A-1	おしゃべり会は、一人のおしゃべり好きの方が認知症になって、昼夜を問わず知人の家に長居をして対応に困っていたので、定例で公民館にあつまり、決まった時間におしゃべりをしようとして楽しもうと民生委員から提案され、合意の得られた知人でスタートした	島の暮らしの継続に向け課題に取り組む	
104-D-4	自治会は過去に島内移住希望者のアパートを確保した経験があり、地元の高齢者が家屋の老朽化により、住居を失い、島外へ転出せざるを得なかったという課題に直面したとき、高齢者のためのアパート建設に、取り組み、住民の理解も得られた		「住民同士で支え合う」を継承する地域づくり
108-F-8	島の伝統行事を継承するために、定期的集まる機会がつくられ、参加した婦人たちは、婦人会活動について話し合う機会にもなり、新しい島の特産品が共同開発され、婦人会活動が活発化した	活動が定着・波及することにより交流を拡げる	
112-C-3	美化活動に取り組んでいた婦人達のサークルは、引きこもりがちな高齢者の自宅前にも植栽活動をあげ、水撒きを依頼したことで、外出のきっかけとなり、通行人との会話や井戸端会議が行われた		
2-A-1	ボランティアとして島の高齢者の世話をするより、高齢者をその気にさせることは、難しいので、高齢者の力を引き出しできることをしてもらうことを心がけた	高齢者との関わり方を内省し、住民と支え合う意識を呼び覚ます	
85-G-11	唐辛子の生産・出荷は高齢者の就労として定着し、加工にも参入したいので、そのリーダーを引き受ける高齢者を探した	活動の継続と地域の発展のための役割を模索する	
52-E-5	世話人としての活動を見直す機会が必要であり、他の地域で実施されている世話人やボランティアと情報交換したいので、そのつなぎ方を探した		

Ⅳ. 考察

1. 地域活動にみいだされた互助の機能

1) 伝播する互助

島嶼地域における高齢者の地域活動に見出された互助は、世話し世話される関係を醸成し、その体験を促し、行政を活用しながら【世話し世話される活動の積み重ねで住民よる助け合いの風土へ貢献】していた。

恩田¹⁾は、支える人と支えられる人が往々に入れ替わる関係を互助ネットワークと位置づけ、二者間でのやりとりではなく、さまざまな他者との関係を取り結ぶ様子を「恩送り」と表現している。そして、「恩送り」の行為における、他者の自立を見守ることと手を差し伸べることの見極めこそが、生活の知恵であると述べている。

島嶼地域の住民は、地域活動を通して、互いによく知り合い、そのことがさらに助け合うことを支え、恩送りの行為における見極めを可能にしていると考え、そして、高齢者の世話をしながら、同時に高齢者に世話されることを繰り返すことで、高齢者の参加を広げ、促していた。「恩送り」の行為により伝播する互助は、住民同士の交流の機会を広げ、高齢者の活動を促進しており、介護予防に貢献していると考えられた。

2) 自助を高める互助

島嶼地域における高齢者の地域活動に見出された互助は、交流を目的として、高齢者のできそうなことを見つけ、できないことを補い、【高齢者に馴染む活動で楽しみの醸成】していた。

メイヤロフ¹⁴⁾は、「ケアは、私がこの世界で“場の中にいる”ことを可能にする」と述べ、それは、ほかの人にかかわっているという自分自身の在り方によって認識され、絶えず新しくなり、力動的な安定を指すと説明している。

地域活動において、世話される存在であった高齢者は、活動を通してできることを増やし、自助を高めていた。同時に、世話する存在であった住民は、高齢者を支えることを通してできることを増やし、成長を実感していた。これは、高齢者と住民それぞれが、“場の中にいる”ことを可能にしていると考え、自助を高める互助は、公助や共助が脆弱な島嶼地域において、高齢者の地域活動への参加を支え、同時に高齢者と住民が、地域活動の担い手としてできることを増やし地域を支える力を育み、自律した

暮らしの維持につながっていると考えられた。

3) 当事者の関与で発展する互助

島嶼地域における高齢者の地域活動に見出された互助は、暮らしの課題に取り組み、その定着・波及により、【「島で暮らす」を生きる交流の促進】をし、支え合う意識の喚起と役割の模索により、【「住民同士で支え合う」を継承する地域づくり】につながっていた。

暉峻¹⁵⁾は、「対話のもつ平等性、相互性、話し手の感情や主観を排除しない人間の全体性、勝ち負けのない対話の中から生まれるものへの尊敬—それらのことが対話の魅力になっている」と述べている。

島嶼地域は、環海性、狭小性、孤立性という特徴から、人口の移動が少なく、役割関係の重複などからかかわりは頻回で長期間にわたる。そのため他者を排除しようとせず、対話が成立しやすい条件を持ち合わせている。そのことが地域活動で過去に課題解決してきた知恵を活かすこと、当事者である高齢者とかかわりから課題に気づくこと、高齢者と一緒に課題解決のアイデアを求めることを可能にしていると考えられた。当事者の関与で発展する互助は、住民の過去に学ぶ態度と課題に気づく感受性から、地域活動の継続と発展に期待がもてると考えられた。

以上のことから、島嶼地域における高齢者への「地域によるケア」にみいだされた互助は、伝播し、自助を高め、当事者の関与によって発展しており、地域の実情の応じた地域包括ケアの基盤となり得ることが示唆された。

2. 顔の見える地域づくり

互助は、伝播する存在であり、自助を高める存在であり、当事者の関与によって発展できる存在であった。M. B. Ayley¹²⁾は、公的サービスあるいは専門職サービスは、当事者とその家族、友人、コミュニティの他のメンバーによってなされる、あるいはなされるケアや援助を、補完し、援助し、協力するものであるべきと結論づけている。そして、そのためには、当事者とその家族、友人、コミュニティのほかのメンバーによってなされるケアや援助を把握することが必要になると述べており、それを可能にするのが顔の見える関係である。つまり、顔の見える地域づくりは、当事者を取り巻く人間関係に織り込まれる互助が見える化し、公的サービス、専門職サービスを提供できるようつなぐことと考える。

大湾¹¹⁾は、波照間島の「互助」の高さに着目して、互助の機能を活性化させたことで、公助・共助・自助を補い高齢者の地域ケアを誕生させた。そのプロセスは、専門職として島に介入し、全数調査による実態把握だけでなく、定例会議による住民との対話と、住民全体への情報の発信による徹底した情報共有があった。つまり、専門職と住民との対話、住民同士の対話、島全体での情報共有が、地域における互助の様相を見える化し、行政と専門職による補完を可能にしたと考える。これは、Bayleyの示す‘Care by the Community’すなわち「地域によるケア」の姿といえる。本研究で把握した地域活動においても、高齢者、住民、行政、専門職は、活動を通しての対話、互いに情報を発信し、あるいは情報を受信するという情報の共有が捉えられた。

互助の機能は、超高齢社会においてケアの担い手と高齢者自らの生きがいの醸成の観点からその活用を図っていく必要がある。したがって、専門職と住民との対話、住民同士の対話、島全体での情報共有が、地域における互助の様相を見える化し、顔の見える地域づくりに取り組むことは、高齢者ケアを担う看護職にとって、地域包括ケアに寄与する重要な役割と考える。

V. おわりに

本研究は、住民同士による助け合いまたは住民のボランティアによる高齢者のための活動から互助の機能を考察した。互助による地域活動は、高齢者の困りごとや危機感をきっかけとした活動、地域の課題を捉えた住民による行政への提案をきっかけとした活動、地位活動から派生したあらたな地域活動、自分たちが楽しむための活動、住民のアイデアをきっかけにした活動があった。これらは、住民の身近な他者への共感力、想像力の発揮ともいえる。我が国が直面している社会保障の課題は、個人の公共意識の衰退と行政依存を生み、孤立という新たな社会的リスクに対峙していると指摘されて久しい¹⁶⁾。島嶼地域における高齢者の「地域によるケア」は、個人の公共意識のモデルであり、その共感力、想像力にねざした行動により、行政依存を払しょくした住民の姿と捉えられる。行政や専門職は、このような住民の姿に触れ、学ぶことを通して、様々な地域で潜在化している住民同士の助け合いを見いだす力をつけることができると考える。

本研究は、把握した地域活動は紹介によるネットワークサンプリングであることから、どの島も活動

を網羅して捉えることはできていない。しかし、顔の見える地域づくりのためには、行政や専門職は、互助による地域活動を把握し、互助の担い手である高齢者や住民の発信に耳を傾け、対話を試み、情報の共有を徹底することが求められる。今後の課題は、住民の共感力、想像力に根差した行動を捉える視点を見いだし、専門職として地域における互助をアセスメントするための技法を確立することである。

謝辞

本研究は、地域医療介護総合確保基金の補助を受けて実施した島しょ・へき地の地域包括構築支援事業（代表：大湾明美）の活動内容の一部を整理しました。そのほか、報告すべきCOIはありません。

引用文献

- 1) 恩田守雄：支え合いの社会システム－東アジアの互助慣行から考える－。株式会社ミネルヴァ書房(京都)，17-80，2019.
- 2) 白澤政和：ケースマネジメントの理論と実際。中央法規(東京)，109-126，1992.
- 3) 厚生労働省。地域包括ケア研究会報告書～今後の検討のための論点整理。 <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/05/h0522-1.html> (2022 年 1 月 31 日現在)。2009.
- 4) 長谷亮佑，山口奈津，ホセイン・マハブブほか：中山間地域住民の食事・買い物の状況からみた自宅生活継続のための方策の検討。厚生指標，65(2)：30-34，2018.
- 5) 小澤多賀子，田中喜代次，栗盛須雅子ほか：高齢ボランティアによる介護予防体操の普及活動が要介護認定状況に及ぼす影響。厚生指標，64(13)：9-15，2017.
- 6) 白井和美，杉浦加代子，津下一代：地域包括支援センターの機能強化につながる都道府県支援の在り方の考察。日本公衆衛生雑誌，64(10)：630-637，2017.
- 7) 眞崎直子，松原みゆき，林真二ほか：都市型準限界集落の防災健康危機管理についての住民の意識調査。日本看護福祉学会誌，25(2)：187-197，2020.
- 8) 大湾明美，坂東瑠美，砂川ゆかりほか：沖縄の「互助」の復活による地域ケアの創造 小離島の祭事を活かしたサービス中止の挑戦とその評価から。文化看護学会誌，11(1)：2-11，2019.
- 9) 沖縄県：県立病院附属診療所の介護サービス事

- 業実施状況. 沖縄県福祉保健部長寿対社会対策室. 2003.
- 10) 沖縄県：平成11年度沖縄県在宅福祉推進等事業—緊急離島地域ホームヘルパー養成研修事業報告書. 2001.
- 11) 大湾明美：島に学ぶ地域ケア 高齢者の豊かな人生を創る発想の転換. オフィス・コオリノ(東京), 73-105, 2021.
- 12) Michael Bayley : MENTAL HANDICAP AND COMMUNITY CARE A Study of Mentally Handicapped People in Sheffield. Great Britain, 1-23, 1973.
- 13) 内閣府：沖縄における今後の離島振興策に関する調査報告書. <http://www.ogb.go.jp/sinkou/shinki/ritosinkosaku.pdf> (2016年11月15日現在).
- 14) Milton Mayeroff. 田村真, 向野宣之(訳)：ケアの本質 生きることの意味. ゆみる出版(東京), 110-123, 1971/1987.
- 15) 暉峻俊子. 対話する社会へ. 岩波新書(東京), 108-113, 2017.
- 16) 山崎史郎：人口減少と社会保障. 中央公論新社(東京), 3-62, 2017.